

古銭の謎

野村胡堂

青空文庫

一

「別びんさん勘定だよ、……こんなに多勢居る娘さんが、一人も寄り付かないのは驚いたネ、せめて、勘定だけは取ってくれよ」
とてもいい心持そう。珍々亭のスタンド前、一番人目に付こうという場所を一人占めにして、一人の老紳士が太平楽を極^きめて居ります。

「へエ百八十五円頂戴いたします」

そういうのは、十七八の女給、

「百八十五円？　それは安い、八百五十円の間違いじゃあるまい

ネ」

胡麻塩になつた山羊髭^{やぎ}を喰い反らした人の好き^{そう}相な顔を、女給の鼻の先へヌツと突出します。

「間違ひなんかいたしません、百八十五円^えン」

事面倒と見て、切口上にまくし立てる女給の前へ、かくしから掴み出した、金銀銅銭をザラリと撒いて、

「サア、この中から好きな丈^だけ取ってくれ」

「アツ」

女給は驚いたわけ、その一^ひと掴みの金銀銅銭というのは、悉^{ことごと}く

古銭ばかり、小判、二分金、一朱銀、天保銭から、文久銭、駒^{こま}

曳^き銭^{ぜに}もあれば、永楽銭もあるという有様、選^よりわけ^{まで}る迄もなく、

今日通用する金は一枚も交つては居ません。

「アラ御冗談なすつてはいけませんよ。みんな、昔のおあしばかりじゃありませんか」

相手が少々甘いを見たか、若い女給さんなかなか負けません。

「これじゃいけないかネ、困つた事に今日は金が無いんだ、尤ももつと金が無いと言つたつて無銭飲食じゃないよ、この通り、巡礼お鶴じゃないが小判というものはたと持つて居る……」

「いけませんよ、冗談をなすつちや、そうでなくてさえ、時々西洋の銀貨や、支那の銀貨を掴まされて、お帳場から叱られるんです。小判なんかで頂いたら、どんな事になるか判つたものじゃありません」

「相すまん、誠に私が悪かつた。^{わたし}が、聞いてくれ、斯^こういうわけだ。私は古銭を集めるのが道楽でな、家を出る時は、充分金を持つて出た筈なんだが、途中二三ヶ所で古銭に引つかかつて、とうとうこの通り。私のガマ口には、明治以後のおあしは一銭も無くなつてしまった、ハツハツハツ驚いたか^{テーブル}」
卓の古銭の上へ、空っぽのガマ口を^{ほう}投り出してカラカラと笑ひ出しました。

午後一時頃、珍々亭は人の立てこむ時刻ですから、この小喜劇は、たちまち店中の見物になつてしまいました。第一、喜劇の主人公なる、この古銭蒐集家の風采が變つて居ります。頭こそ左^さまで禿げて居りませんが、五十五六年配で、山羊髭^{やぎ}で、一番贅^{ぜいたく}沢

な布地^{きじ}を一番無恰好に裁ったといったような、ダブダブの背広に、風呂敷ほどある大きなネクタイ、マドロスパイプを脂^{やに}下^{さが}りにくわえて居ります。

この現代人離れのした風采で、小判と天保銭を卓^{テーブル}の上へ投げ出したのですから、店中の客は「ワッ」と声をあげて喜びました。いくら銀座でも、こんな奇抜な図は滅多に見られるものではありません。

「お立会の衆、笑ってはいけないよ、私は古銭研究会の幹事、南市太郎、雅号を愛銭堂老人という者じゃ、家へ帰ると金なんか馬に食わせるほどある、嘘だと思ったら、興信録を見なさい、こう見えたって百万長者だ、……百八十五円が何んだい……」

老人、何処^{どこ}まで発展するかわかりません。その時、

「御免下さい、甚だ失礼ですが……」

隣の卓^{テーブル}で茶を飲んで居た中年配の立派な紳士、見るに見兼ねた様子で声をかけました。

「な、なんですか」

老人はぬからぬ顔をそちらへ向けます。

「甚だ失礼ですが、そのお勘定を私に立てかえさして頂けませんでしょうか」

「そ、それはいかん、あなたは見ず知らずの方じゃ、南市太郎未だ人の恵みは受けん」

「決してそういうわけでは御座いません、何時^{いつ}でも、お序^{ついで}の節お

返し下されば宜よろしいので」

「なるほど、あなたは、なかなか話がわかり相じや、宜しい、百八十五円、まさに拝借いたそう、抵当は天保銭が一枚、永楽銭が……」

「イヤ、それには及びません、古銭研究会の幹事をしていらつしやるなら、丁ちようど度鑑定して頂き度たいものも御座います、手前の宅まで御一緒を願えませんか」

これは、南老人とは反対に、巾地きれじは粗末だが、仕立は無類という、身体からだにピタリと合ったモーニングを着て、赤革のカバンを持った中年の紳士、懐の金と、目尻の微笑は切らした事が無い、といった感じのする人物です。

二

電車に揺られ乍^{なが}ら、中年配の紳士は南市太郎老人にこう話しました。

「……そういうわけで、主人が私に遺した、ほんの少しばかりの古銭があるのです。古銭の中には、一枚何千円何万円にも取引される品があるという事は聞き知って居りますが、私はその道にかけては全くの素人で、どれが値打があるのやら、全く見当が付きません。いきなり商売人の手にかかるより、あなたのような有名な専門家に鑑定して頂いて、値打があるものなら、適当な値段で

お引受け下されば、私は申すまでもなく、そう申しては失礼ですが、あなたも御便宜ではないかと思ひましたので……」

「なるほど、よく解りました、そんな口には、得て大掘出しがあるもので、私共蒐集家には願つても無い機会なんで……」

電車は二人を乗せて、古い郊外の町を駆けて居ります。

「ところで、あなたの御主人というのは、一体何んという方ですかい」

思ひ出したように南老人は尋ねます。

「春山昇、……と申しました」

「才才、あの富豪の春山さん、あの方なら私もよく知つて居る、古銭蒐集家としても、日本での第一人者じゃ、いや大した方を御

主人に持たれて幸せだ、すると何んかな、あなたは、春山氏の何に当って居るわけかな」

「執事とも、秘書とも、一切の事務を私がいたして、居りました、あの通り細かい事には、関係なさらない方で」

「そうそう、春山氏はお大名のように鷹揚な人物であつたな、……ところで、その春山氏は、何ヶ月も前から、行方不明ゆくえになつて居るというでは無いか」

「そうです、そのために、数ならぬ私共まで、心を痛めて居るよ
うな次第で……」

端嚴な顔を伏せて、暗然と言葉を落します。雇人といつても千萬長者の執事、人品骨柄さすがに立派なものです。

「ところで、春山氏の相続人はどうか」

「それがむずかしいのです、春山氏は古銭を友に一生独身で暮し、夫人もお子様も御兄弟も何んにもありません。遠い御親類の方が二人、——一方は若い男の方で、母親と一緒に、一方は若いお娘さんで、父親と一緒に——主人の生前から同居して入らつしやいます、どちらも同じような関係の方で、法律上どちらを相続人と定めようも御座いませ、尤も主人が行方不明ゆくえになつてからまだ八ヶ月たったばかりで、失踪の手續をして、相続人を極めるには、未だ少し間があります、その期間内に、主人の生死いきしにを確かめるか、それが出来なければ、せめて遺言状を発見し度いと、私一人で氣をもんで居る次第で御座います」

「なるほど、それは御心配な事じゃ、警察の手も入った事だろうが、生きて居るとも死んだとも、その辺の事が解らないとは可怪おかしいな」

「御身分の方ですから、警察も全力を傾けて探しましたが、少しも手がかりはありません。その頃の新聞で御承知でしょうが、八ヶ月前のある晩十時頃、陽子さん——これはお邸やしきに同居して入らつしやる、御親類のお嬢さんですが——に送られて、本屋おもやの寢室へ入った事はわかつて居りますが、その翌あくる朝、浩一郎さん——これもお邸に同居して、陽子さんの父子と睨み合つて居る形になつて居る青年です——が、用事があつて、主人の寢室を叩くと、半ば空っぽで、主人は影も形も無かつたのです。それから大騒ぎ

になって、警察の力も借り、あらゆる名ある私立探偵にも来てもらって、草を分けて探しましたが、主人は寝巻のままで、スリツパを突っかけて出かけたらしいという事と玄関の戸が開いて居た、という以外は何んにもわかりません」

「フムフム、そんな事は、なんだか新聞で読んだような気がするよ、それから……」

「一時は、財産争いの関係から、陽子さん父娘と、浩一郎さん母子に疑がかかりましたが、相続権こそ争って居りますが、どちらも立派な方で、人などをあやめるような方では御座いけません、間もなく疑が晴れて、唯今では、自然と解るのを待つより外に方法が無いという事になってしまいました」

「成程なるほど成程、それはお困りじやな、ところで、あなたのお名前

は何と言われるな」

「アツ、申し遅れました、私は春山家の執事で、さきようみちのすけ左京路之助と

申します」

この時電車は急にスピードを落して、停留所に入って行きました。二人は電車をおりると、郊外の横町を二つ三つ通り抜けてとある森の中の、素晴らしい大鉄門の中へ静かに入って行きました。

三

門を入ると左右の植こみ、その間を小半町ほど行くと西洋風の

大玄関になります。

真つ直ぐに入つて行くと、左右の植込から出て来た出会頭、不意を喰つて、弾き飛ばされたように、玄関の両方へ立つた者があります、右は美しい若い娘、左は運動家らしい恰幅のいい青年、若い二人の眼は、火の様に相撃ちます。

「あれが相続争いの当人達です。右は陽子さん、左は浩一郎さん……」

南老人の耳へ左京路之助はこうささやいてくれました。

「これ陽子、何をして居るそんな泥棒猫のような男を見るものではない」

植込からぬつと顔を出したのは、
岩^{がんじょう}丈造りの半白の老人、

浩一郎をねめ廻して、陽子の手を取らぬばかり植込の方へ引き戻そうとします。

「ナニ泥棒猫？ それは一体誰の事だ」

青年は思わずカツとして、手に持った鞭を握りしめます。見ると長靴に乗馬服凛々りりしく少し汗ばんで、今遠乗りから帰って来たばかりという形をして居ります。

「浩一郎さん、まあ、まあ」

南老人の後から降り立った左京路之助、青年の腕を掴むようにして、

「いつもの事に、腹を立ててはいけません、相手は老人と若い婦人では、喧嘩にもなりますまい」

「それは解つて居りますが、あんまりあの老人は失礼な事を言います」

「まあまあ、そんな事は内輪同志で解決の出来ることです。今日は不思議な客をおつれしました、紹介しましょう。これは浩一郎君、こちらは南老人」

「初めて」

「宜しく」

「兎に角中へ入つて、お茶でも入れさせましょう」
とかく

三人は本屋の裏手にある左京路之助の執事部屋へ入つて行きました。執事の部屋といつても、さすが聞えた大富豪の邸宅ですから、その豪勢振りは、並大抵の金持の主人では追つ付かない位で

す。

この建物は、凹^{おうじ}字形になつて、鉄筋コンクリートの城塞風の設計で、正面——即ち、凹字形の底部——は、本屋^{おもや}で、表側全部と裏の二階は、行方^{ゆくえ}不明になつた主人春山昇が使用し、凹字形の右翼は、陽子と父、左翼は浩一郎とその母が借り受け同じ棟続きながら、呉越という古めかしく聞えますが、手っ取早く言えば敵同志のように暮して居たのでした。

「早速古銭をお目にかけましょうか」

椅子^{いす}をすすめて、左京路之助がいうと、南老人は、

「エエどうぞ」

のどから手が出るといった形^{かた}ちで乗り出して参ります。

「叔父は日本一、いや世界でも有名な古銭家でしたから、珍らしい高価な品を、非常に沢^{たくさん}山持つて居る筈でした、亡くなつてから見ると、ろくなのは一枚も残つて居ません、不思議なことがあるものです」

浩一郎青年は、南老人にこんな事を話して居る内に、左京は二百枚の古銭をガラスの箱に並べたまま持つて参りました。

「どうせ、大したものはあるまいと思いますが、一応御覧下さい」
「フム、成程、手頃があるようじゃ、お望なら、これを皆んな求めても宜しい、……千五百円位、どうじゃな、いけなければ、もう二三百円は出しても宜しい」

「エエツそんな高価なものですか、これが？」

重厚な左京路之助も、少し面食つて度を外したようです。

「もう少し無いかな」

「無い事ありません」

「いずれ、ゆっくり拝見しよう、ところで、私は、古銭の蒐集も一つの道楽だが、もう一つ変つた道楽がある」

「どんなお道楽ですか」

「早く言えば、この節流行る探偵趣味じゃ」

「ヘエ？」

「探偵じゃよ。シャーロック・ホームスのように、警察にも解らないような大疑獄が、私にはちゃんと解るから不思議じゃ」

「ヘエ……」

「何んじや、疑わし相な顔をしては困るね、私の探偵能力を疑うなら、シャーロック・ホームズが、一つの帽子や時計から、持主の特性を目に見るように言い当てたように、私はあなたの身の上を言い当てて見せよう」

「私の？」

「左様、あなたの身の上、……あなたは、母親一人しか無い筈じや、それから、至って馬が好きじやな、それから……」

「もう沢山、乗馬服を着て居れば、馬が好きに極^きまって居ますし、母親一人という事は、多分左京さんからでもお聞きになったでしょう」

「エライ、浩一郎さんの方が、私よりは又一段と名探偵じゃハッ

ハッハッハッ

「ハッハッハハ」

どうも、大変な自称名探偵があつたもので、左京路之助も、思わず吹き出してしまいました。

四

間もなく三人はつれ立って、浩一郎の住居^{すまい}へ参りました。

この大邸宅の左翼十数室の内、四つ五つをあてがわれて、浩一郎とその母親は住んで居るのです。

「この方が探偵？」

左京執事と、息子の浩一郎に紹介されて、編物の手を休めた母親は、老眼鏡越しに南老人の顔を眺めました。

「この方があの探……」

危うく吹き出しそうになって、老女は忙しく編針を動かします。山羊髭にダブダブの洋服、風呂敷ほどのネクタイに、青い靴下の出る短かいズボン、こんな間拔な格好をさせるに、どれだけ骨が折れるだろうと思うような、飛切上等の風采を見ると、身扮みなりのやかましい老女は、ツイ腹の底からこみ上げて来る可笑おかしさの始末に困ってしまったのです。

「私がしらべて解らんという事はない」

南老人はそんな事に驚くような柄ではありません、浩一郎から

借りた虫眼鏡、それを持って、四つん這いになったまま、室^{へや}から室^{へや}へと隅々まで調べて居ります。

「南さん、主人が行方^{ゆくえ}不明になったのは、八ヶ月も前の話ですよ、今頃まで、そんな所に何んかの形跡が残って居るでしょうか。當時警察の方が見えて、嘗^なめるように丁寧にしらべた上、この室^{へや}はそれから、二百四五十回掃除して居ますよ」

左京執事に注意されて、

「な、成程」

腰を延して今更感心して居ります。

けれども、愛銭堂老人又の名素人探偵の南市太郎老人、そんな事ではなかなか止^よしません、しばらく、室^{へや}々^{へや}の壁を叩いたり床

板を踏んだり、電灯をつけて見たり、額の裏をのぞいたりして居りましたが、フト思い付いたように、

「ところで、春山氏の遺産はどうなつて居るかな」

「それがおかしいのです」

左京路之助待つてましたという形で答えました。

「不動産には別に変りがありませんが、非常に沢山あるだろうと思われる、宝石、現金、有価証券などが、おびただ夥しい古銭と一緒に、どこ何処に隠してあるか、どうしても解らないのです。私の推定によると、それは、三百万円から五百万円の価格に上るものだろうと思えますが」

「ホウ、それは驚いた」

「ところで、この邸の中は、専門家が半年に亙わたつて研究し尽しましたし、銀行その他、取引先も悉くしらべて見ましたが、どうしても行方ゆくえがわかりません」

「外に、残して置いたものや、保管してあつたものは無かつたかな」

「何んにも」

今まで黙つて聞いて居た浩一郎は、この時二人の言を障さえぎつて、
「あります、たった一つ、あの古銭と鍵」

「それは何んです」

南老人が聞きとがめると、左京執事は引取つて、

「私からお話しましょう、これは一向つまらないものですが……」

主人が行方不明になる少し前、浩一郎さんと私と、あの陽子さんゆくえを呼んで、一つの手箱を渡しました、（私に万一の事があつたら、これを開け……）とこういう命令です。行方不明になつて、一ヶ月ばかり後、この事を思い出して、金庫の中から預つてある手箱を出し、三人立会の上、あけて見ると、中からは不思議な品がたつた二つだけ出て参りました。一つは陽子殿へと札が付いて、柄の端が輪になつて、先へ刀のように少し広くなり、四寸ばかり延びて真角まっかくに切れて居る、銅で作つた古代支那の貨幣で、一つは浩一郎殿へと書いて、銀で作つた、可愛らしい鍵です。ところで、その古銭と鍵は、どこへ使うものか、何んの足しになるものか、少しも解りません」

「フン、面白いな、浩一郎さん、その鍵ちよつとというのを、一寸私へ借かして下さらんか」

浩一郎は、母親と左京の顔を見比べましたが、別に反対する風も無いので、時計の鎖から外して、銀の小さい鍵を、南老人の手の上に載せてやりました。

「そして、これから向う側のお嬢さんおやこ父娘を訪ねるとしましょう」

「これ浩一郎」

南老人と左京の後へついて行こうとするせがれ倅を、母親は驚いて呼び止めました。

「あんな場所へ行つてはいけません」

「……………」

「あんな悪人の側へ行くと、ろくな事はありません、あなたは
止しなさい」

眼鏡めがねを取って、編物の上にそつと置きましたが、その顔には解
き難い忿怒ふんぬの色が、サツと動きます。

五

それから間もなく、南老人と左京路之助は、建物の右翼に、陽
子おやこ父娘へやの室を訪ねて居りました。

「この方は何んじや、左京君」

「古銭研究者でもあり、探偵でもある相です、南さんと仰おっしやる

方です」

「なに探偵、何んの用があつてお出^{いで}じや」

「主人の行方^{ゆくえ}不明について、探索して見たいと言われます」

「なんだ、そんな事なら止したがよからう。名探偵が何人となく、時間も金も惜しまずに研究して解らない事が、そういつては失礼だが、その御^ご人^{じん}体^{てい}に解るわけは無い」

「ウーム」

老探偵南愛銭堂老人も、一ペンに吹き飛ばされそうです。

「帰んなさい帰んなさい」

「向う側の方は、何も彼^かも見せてくれたのに、こつち側のあなたが見せないというのは甚だ面白くないて」

「何、何を怪^けしからん事をいうのじゃ、疑わしい事でもあるなら、見てもらおう。隅から隅まで、堪能するまで見てもらおうじやないか、向う側の泥棒猫が、何んか余計な事でもたき付けたんだらう」

ベルを鳴らすと娘が出て来ます。

「この方は探偵だ相じゃ、笑つちや失礼だよ……、尤もこの御人体を見せて、若い娘に笑つちやいけないという方が無理かも知れないが……ウフツ」

娘もたまらなくなつて、ハンケチで顔を隠してしまいました。

南老人、そんな事は委細構わず、浩一郎母子^{おやこ}の室^{へや}でしたと、同

じような事を、根気よく繰り返して、しさいらしく首を曲げて居

りましたが、

「春山氏から遺された、支那の古銭というのを拝見し度い」

というと、娘は黙って引こんで、自分の室^{へや}から、少し手ずれのした、青銅の刀形の古銭を持って来て、父のうなづく顔を見乍ら、南老人へ渡してやりました。

「これを一日拝借し度いが」

「それはいかんといったら、向う側の泥棒猫を引合に出すだろう、あなたを信用するわけじゃないが、向う側より秘密主義だと思われるのが業^{ごう}腹^{はら}だから、勝手に持って行きなさるがいい」

「それは有難い」

南老人は、けろりとして、それをかくしの中に滑りこませまし

た。が、向き直って、

「なるほど、これは美しい」

後ろ手に、床の間の一軸を拝見という格好で、何を見るかと思うと、娘の陽子の顔をつくづく眺めます。

窓から入る夕日を受けて、藤色の洋服に照り栄ゆる処女むすめの顔の美しさは、南老人でなくとも見とれる程でした。夢みる眼まなこ、霞む眉、象牙ぞうげを刻んだような鼻に、紅玉石ルビーの唇、現代娘の愛くるしさと清々すがすがしさが、この娘の顔に溢れて居ります。

「アレ……………」

娘は驚いて逃げ出してしまいました。

「ハッハッハッハ、いや罪は無い、ところで左京氏、私は今晚こ

こへ御厄介になつても差^{さしつかえ}支あるまいな。なに、長イスか寝台
さえあれば結構で、一と晩ゆるゆるとあなたの持つて居られる古
銭も拝見し、私一流の探偵方針も定め度^きい……私の宅？ それは
構わん、こんな事には慣れたもので、一寸^{ちよつと}電話を拝借すれば充
分じゃ」

左京執事の気乗りのしない顔、陽子の父の苦々しい顔、そんな
ものは、てんでこの老探偵の眼へ入りませんでした。

六

あくる日の正午五分前、時計の針を見つめて居た陽子は、父親

へこう申しました。

「お父様、あと五分よ」

「それでは、お前やつて見る気か」

「エ、エ」

「あんな変な探偵のいう事が信用出来ると思うのかい」

「少し調子は変ですけど、あの方はどつか、不思議に人を動かすところがありますワ、私はあの方の言う事をきいて、兎も角やつて見る方がいいような気がしてなりません」

「フーム」

「さあ、あと三分」

「この古銭をどうすればいいのだ」

「ピアノを退^どかした跡に、小さい金属板が壁に打ちつけてあるでしょう、その金属板の真ん中に、古銭の頭の輪になった部分が入るほどの、小さい溝があります、それへ古銭の頭をさしこんで、右へ二つ廻せばいいんですって」

「こうか」

「未^まだ、お父様、廻してはいけません、もう一分」

「大丈夫か」

「さあ」

父親はまだ不安相にして居りましたが、娘の決意に促されて、真^{しんちゆう}鍬板の中の溝に、古銭の頭をさしこんで、一つ二つ廻すと、今まで壁とばかり思ってた居た、柱と柱の間の一尺五寸ほどの部分

が、スーツと内の方へ開いて、そこへ真暗な道が、ポカリと口を開きました。

「お父様、参りましょう」

「これ陽子、待った」

「イエ、私は、こうしなければ、ならないような気がいたします、あの間拔な探偵が、今朝早く私を呼び出して、こうこうしろと言った時から、私はもう、すっかり決心して居るのです」

娘の決心に励まされて、父親もすぐその後に続きました。身体からだを横にしなければ通られないような道は、三四間続くと、その先には恐ろしく急な階段が、奈落の底まで続くように、脚あしもと下もとに口を開いて居ります。

「大丈夫か」

「急な階子段はしごですよ、お気をつけなすつて」

父娘おやこは、懷中電灯の光をたよりに、その段々を三十幾つか下ると、今度はやや広い廊下へ出ました。広いと言ったところでせいぜい三尺そこそこ、相変らず、鼻をつままれても判らぬような、恐ろしい闇です。

その廊下を二三十間行くと、道はやや広い暗室へ入ります。湿っぽい不愉快な空氣が鼻を衝いて、今にも窒息するのではないかと思われるようです。

暗室の広さは五坪程、両方に小さい入口があつて、四壁は煉瓦れんがを積み上げ、下は全部コンクリート、牢獄よりも堅固に無氣味に

出来て居りますが、不思議な事に、その暗室の真ん中程のところに、六尺四方の鉄板があつて、その上の真ん中に、一尺そこそこの銀の盆が取り付けられ、懷中電灯の光を受けて、さんぜん燦然として光つて居ります。

フト気が付くと、ちようど丁度向い合つたもう一つの入口から、サツと光が射して、明かに人声、

「お母様、大丈夫ですか」

「おお氣味が悪い、何んという恐ろしい道でしょう、あんな変な探偵のいう事なんか当てになるのかい」

「サア、それは僕にもわかりません、けれども、どうも、あの探偵は、何も彼も見通して居るようで、命ぜられた通りにしなければ

ばならなかったのです」

疑うべくもない浩一郎とその母親です、そう解ると、陽子父娘^{おやこ}の表情は、足の下に横わる鉄板のように冷たくなりました。

懐中電灯で双方から照し合って、仇同士^{かたき}が四人、不思議な暗黒世界で落ち合った事がわかると、（あの間拔な探偵にからかわれたのではないか）という考えが四人の胸に同時に閃きました。

けれども、事件は急速に発展して、それ以上に考える暇もありませんでした。間もなく、浩一郎母子^{おやこ}の降りて来た道から、葉巻の匂いがプンと先づれをして来ました、冷たいカビ臭い地下の密室に、上等の葉巻の匂い、何んというそれは不思議な取合せでしょう？

「煙草^{たばこ}はお止しになったら」

南老人の声です。

「イヤこれだけは許して下さい、ここの空気は湿っぽくて臭くてとてもかないません」

左京執事の声です。

「才才皆様、もうおそろいでしたな、私の言う事を信じて、こんな無気味な所へ、お出^{いで}下すつた事を感謝いたします」

三つの懷中電灯に照されて、山羊髭^{やぎ}の南老人は語り出しました。
「先^まず陽子さんの古銭を借して下さい、これを銀盆の上に置く……」

銀盆の上には矢張^{やは}り、古銭と同じ長さ四寸ばかりの刀形の凹み

があります、それに青銅の古銭をピタリとはめこんで、ギユツと右に廻すと、銀盆はポコリと外れて、その跡に小さい鍵穴が現われます。

「今度は浩一郎さんの鍵を拝借……御覧下さい、……春山昇氏は、その二人の相続者達が争う事を好まなかったのです、お解りでしょう。この鍵と古銭と、二つ揃わなければ、秘密の宝庫を開ける事は出来なかったのです、……春山氏は、浩一郎さんと陽子さんと、仲よく遺産を分配するように、この古銭と鍵を一つずつ分けて遺されたのです」

と鉄板の小さい穴に鍵を入れて、一つひねると、手に従って大鉄板は、スツと横の方に滑って隠れそのあとへ、方一間の大穴、

物凄い口をパツと開けました。

「驚いてはいけませんよサア」

南老人が懷中電灯を差し向けると、中には金銀珠玉と思いの外、俯向になつた人間の死体と、真黒な桶が一つ。

「アツ」

驚きとも恐れともなく陽子と母親は声をあげます。

「よく見て下さい、これが行方不明ゆくえになつた、この家の主人、春山昇氏の遺骸です、空気や湿度や、その他いろいろの関係で遺骸は腐蝕もせず、そのまま屍蠟しろうになつて居ります、が、よく見ると、頭に恐ろしい打撲傷があるから、人に殺された事は明白です」

「エツ」

「エッ」

「驚いてはいけません、春山氏を惨殺して、ここへ投げ込んだ犯人が、ここへ貯えて置いた、古銭、珠玉、金銀、有価証券、併せて五百万円程のものを奪い去ったのです」

「エッ」

「エッ」

恐怖と驚きに、ハチ切れ相に緊張した地下の闇の中に、こんな技倆があらうとも思わなかった南老人は、声さえも若やいで、明快無比の判決を下します。

「その犯人は誰です」

「よくわかつて居る、死骸の側に大事な証拠が落してあつた」

「誰です」

「ここに居る」

「エッ」

「それ」

指す方には、謹直無比と思われた執事の左京路之助、早くも形勢を察して、逃げ腰に南老人の方をハタと睨みます。

「エッ、老ぼれ、余計な処へ出しやばる、お前は誰だ」
ところ

「知り度いか」

「ウム、これ程にたくらんだからくりを見破るのはどこの馬の骨かわからぬ古銭家の南老人ではあるまい」

「その通り」

「誰だお前は」

「花房一郎」
はなぶさ

「アッ」

驚いたのは、左京路之助ばか許りではありません。名探偵花房一郎が、老古銭家に化けて入りこもうとは、誰だって気が付くわけはなかったのです。

「これ左京、何をウロウロする、逃げようたつてもう駄目だぞ、この屋敷は、出口出口をすっかり堅めて、蟻の這出る隙間も無い

……、悪党なら悪党らしく、神妙に兜かぶとをぬげ」

「フン、まだ左京路之助は降参しないぞ」

「よしよし、今の内存分に威張って置け。……どうしてわかつたかというのか、行方不明になった春山氏の執事が、珍々亭へ、毎日極ってお茶の時間に行くのを知って、卓テーブルの上へ古銭をバラ撒いて一と芝居書いたんだ。主人を殺して八ヶ月も経って居るからモウそろそろ隠して置いた古銭を金にかえようと思つて居た矢先だから、うまうま引つかかったろう」

「フーム」

左京路之助、バリバリと齒がみをしましたが、サツと飛退くと、「サア、どいつもこいつも聞け、その死体の側の桶へ入ってるの

は、百ポンド余りの火薬だ。こんな時の用意にと、八ヶ月前に入
れて置いたのが役に立って、最後の切り札をおれに握らせる事にな
ったぞ。寄るな寄るな、この葉巻を持って来たのもその為めだ、
こいつを桶へ投げ込むと、この建物は粉片微塵だ、こつばみじん探偵も娘つ子
も一蓮托生よ、サア」

火のついた葉巻をふり上げると、

「ワーツ」

四人の男女は、必死と逃げまどいましたが、元より狭い地下室、
今更騒いだところで追っ付く道理はありません。

「エツ、くたばれ」

葉巻はサツと穴の中へ、しかも桶の真つ唯中へ。

「ワッ！」

這い、転げ、躍り騒ぐ男女の中に、もう一度、物凄い叫喚があらりました。

が、何時^{いつ}まで経つても、火薬の爆発どころか、プスリとも音がしません。

「ウフ、フフフ、ハッハッハッハハハ」

花房一郎とうとう笑い出してしまいました。

「何が可笑^{おか}しい」

「火薬は昨夜^{ゆうべ}の内に片付けて、あとへ泥を入れて置いた事に気が付かないか」

「エッ」

しくじつたりと、飛び退いて逃げ出そうとする左京路之助を追
いすがつて、後から手がかかったと思うと、毬まりの如く投げ飛ばし
て、引き起こした時はもう手錠をはめて居ります。

「エッ、世話を焼かせる」

善悪男女六人、銘々、思い思いの感動にひたり乍ら、もう一度
暗い段々を辿つて明るみへ出ました。外は美しい春の日の午後。

「左様なら、皆さん」

名探偵花房一郎、こう言つたまま振り向きもせず、ダブダブ服
の山羊髭やぎのまま、出口で待つて居た部下に、左京路之助を引立て
さして行こうとします。

「どうしてあの抜路や地下の宝庫がわかったのです、せめて、それだけ聞かして行つて下さい」

浩一郎が後から追っかけて聞くと、にこやかに立ち止つて、

「何んでもない事ですよ、私は春山氏が行方不明ゆくえになった当時、公用の留守中で、この事件に関係しなかったので、古銭研究家に化けて、新規まき直しの探偵に入りこんだのです。ところが最初に手に入つたのは、御存じの通り、あの古銭と鍵でしょう、この前探査した人達は、多分あれを見のがして居たのでしようが、この事件では、あの馬鹿気たような小さい形見が、一番大事な手ばかりだったのです。私は馬鹿な顔をして、両方の室をへやをしらべて見ると、予想の通り、ピアノの後ろや、柱時計の蔭に、不思議な鍵

穴があります。そこで、古銭と鍵を一晩借りて置いて、昨夜^{ゆうべ}あな
たの室^{へや}からソツと地下の暗室へ入りこんで見たのです。銀盆や鉄
板を開けるのは何んでもありません、穴の中を見ると、屍蠟と火
薬がありますから、火薬だけを外へ移して、今日の正午^{ひる}に、両方
から関係者一同に入ってもらう段取にしただけの事です。入らな
い気遣はありません、老人方は相続の事で夢中ですし、左京は万
一犯跡はバレはしまいかと、ビクビクもので見張って居るのです
から。左京の奪い取った財産は、すぐ出て来るでしょう、泥を吐
かせるのはわけありません……。未だわからないところがあり
ますか……。左京が拔道も知らず鍵を持って居ないのに、どうして
主人の死体と火薬を穴の中へ投げこんでから、外へ出たかと言う

のですか、……それは私もいろいろ考えましたよ、けれども、実地を見れば一番よくわかります。——あの死体の入って居た穴の底に、もう一つ、正面の建物の床下へ抜ける道があつたのです。春山氏は財宝を隠したら、その第三の抜け道は塞ぐつもりで、材料を用意して置いたのです、それを知って左京の奴は、その抜道から、財宝と死体とを入れ代えて、あとを春山氏の用意した材料で塞いで置いたのです。今日入った道は、多分左京も知らなかつたでしょう、古銭と鍵のトリックは、あまり茶氣があり過ぎて、左京のような頭の良い悪党には反つて氣が付かないものです。そうでもなければ、あの暗室へ私等と一緒^{わたしら}にノコノコ降りて行く筈ありません、あの上からはどうせ開きっこは無いと、たかを

くくつて居たのでしょう。——どうだい、それに相違あるまい」

探偵は、縄付の左京を顧みてそう言いました。

が、二三歩行くと又立ち止つて、

「お別れに、私はもう一言御注意したいことがあります。——さて皆さん。特にこれは老人方に聴いて頂き度い。相続争いや財産争いもこれで多分一段落でしょうが、老人方が物欲に血眼になつて居る間に、若い人達の生命の泉を掘り下げて居たのです。最初私は浩一郎さんと陽子さんが、玄関で顔を見合せて居るのを見て、その眼に燃える光りは、浅ましい物欲とは似もつかぬものであることを覚りました。手っ取早く申せば、老人方が相続争いに夢中になつて、互に憎み合つて居る間に、若いお二人の胸には、可憐

な恋が芽ぐんで、お互に慕い合つて居たのです。どうぞ、お二人を一緒にして、伸よくこの春山家の財産を継がせてやって下さい、それが私の頂戴する唯一の謝礼です」

夕日を受けて、パツと鼻白む若い二人の顔を後ろに、名探偵花房一郎は、南老人の顔をそのまま、ひようひよう飄々として立ち去りました。

青空文庫情報

底本：「野村胡堂探偵小説全集」作品社

2007（平成19）年4月15日第1刷発行

底本の親本：「踊る美人像」愛翠書房

1949（昭和24）年2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2015年10月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

古銭の謎

野村胡堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>